

ロンドン万博へ続く道

——一八六一（文久元）年のオールコックの旅と日本の「開国」——

佐野真由子

一八六二（文久二年）、ロンドンで開催された万国博覧会に、歴史上初めて日本出品区が設けられたことはよく知られている。出品物の大半を準備したのは、一八五九（安

政六）年から初代駐日英国公使（着任時の肩書は総領事）として江戸に駐在していたラザフォード・オールコックであり、オールコックは日本の出品物に関して、自らカタログ

を編纂した。*International Exhibition, 1862: Catalogue of works of industry and art, sent from Japan* (London: William Clows and Sons) と名づけられた、B5版、一二頁

の冊子がそれである。幕府が供与した品物を含めて、オールコック自身が整えた六一四点からなるコレクションに加え、オールコックの部下で横浜駐在イギリス領事であったフランシス・ハワード・ヴァイスの提供した工芸品など六点、長崎駐在イギリス領事館付の通訳官で、医師でもあったフランシス・ジェラルド・マイバラの収集になる、日本

の薬品一九八種および外科器具五三点のリストが、ここに収められている。

万国博覧会全体の分厚い公式カタログでもむろん、アルファベット順に整理された参加諸国中の然るべき位置——ITALYとLIBERIAの間——に日本(JAPAN)出品区⁽¹⁾の案内が掲載されているが、オールコックの手になる別冊カタログでは、個々の品々がより詳細に紹介されている⁽²⁾。現代ならむろん、写真付きの鮮やかな冊子になるところであるが、紙面を埋め尽くす細かな文字から一つ一つの品物を思い浮かべるのもまた、喜びの尽きない作業である。

ここに列挙された品々を冒頭から数点だけ紹介すれば、
「1 非常に興味深い、色漆の古い棚。釉薬で少し厚みをつけた人物の模様がある。豊潤な浮き彫りを施した青銅と金属の取っ手付き」
「2 古い漆塗りの棚。金で描かれた葉と人物の模様がある」
「3 象眼で人物の模様を低く施

した古い小棚。きわめて珍しい見本」……と続いていくのだが、そうした中に、「6 彫刻を施した、漆を塗っていない杉材の小さな棚。大坂から運ばれたもの」⁴²⁹ 大坂から運ばれた、現代的な銅製品のすばらしい見本。周囲の羽目板一つ一つに高く浮き出した人物像のある火鉢」⁴³⁹ 精密な彫刻を施した青銅製のすばらしい吊り灯笼。大坂で見つけたもの」⁵²⁷、⁵²⁸ 雨傘と日傘。好みに応じて両方に使える（大坂より）」と、地名入りの項目が散見される。むろん、それが大坂で入手した製品であることは記載のとおりであるが、ここにこれらが訳あり顔に登場していることには、実は具体的な背景がある。

実際には大坂だけでなく、このカタログには、同様の品物の説明とともに、長崎、肥前、岡崎、掛川、富士山、熱海、箱根、横浜、江戸、箱館、あるいは九州、東海道といった土地の名称を見出すことができる。そのいずれをも詳しく紹介したい誘惑に駆られるが、本稿の範囲では、まずは考察の対象を大坂に限定しつつ、しかし他の土地にも相通ずるオールコックの足跡を、そこに追いかけていくことにする。その足跡を具体的な糸口として、このときロンドン万博と日本をつないだものについて、あらためて考えてみたい。

一、日本のロンドン万博参加をめぐつて

(一) オールコックという人物

はじめに、前出の日本カタログの執筆者であるラザフォード・オールコックについて、あまりなじみのない読者のために、ごく簡単に説明しておきたい。⁴その人物像を多少なりとも頭に描きながら、本稿で取り上げる彼の仕事や旅、そしてそれが日本の国際関係史にとって意味するところを、考えていたからである。冒頭で述べたとおり、幕末の初代駐日英国公使であったことは、広く知られていると言つてよいだろう。一八五九（安政六）年に来日したとき、満五〇歳であった。

もともと外科医になる教育を受け、三〇歳を過ぎるまで、その道での将来を嘱望されるエリートとして活躍したこと、医師の仕事を離れてからも、その分野に関心と親しみをもち続けたことは、先に紹介したごとく、日本の初の万博参加にあたり、部下の通訳兼医師の名においてであれ、出品物全体の中の割合から見て膨大と言つてよい量の医療器具や薬品を取り揃えたことにも、反映されているのかもしれない。医師としては、ロンドンの当時有数の外科病院で実績を積んだのみならず、イギリスが参戦していたポルトガ

ル、スペインの王位継承戦争に軍医として従軍し、輝かしい成果を残した。

同時に触れておかなくてはならないのが、一〇代の頃から彼の芸術への関心と、とくに彫刻家としての腕である。ロンドンで、また留学先のパリでも、医学生に興味として彫刻家の工房に通い続けたが、その実力は、イギリス芸術協会 (Society of Arts) が芸術家の奨励のために、年間の優秀作品に授与していたメダルを受賞するほどであった。また、この趣味は本業の医学と結びついて、オールコックは解剖模型を製作するようになり、その作品はイギリス政府や外科医協会に買い上げられたという。オールコックが日本の美術工芸品をこよなく愛し、それが万博での日本紹介の仕事にもつながったことは、幕末期の日本の文化交流に関心を持つ人の間では周知のことだが、その美術工芸品への愛に、単なる嗜好を超えたこうした実践の記憶が関係している可能性を考えるのも、興味深いことではなからうか。

さて、三〇代に差し掛かったころ、リウマチ熱によって手指の自由を失い、外科医としての将来を諦めざるをえなくなつた彼に新しい道を開いたのが、先に触れた従軍とその他のの戦後処理を通じて、医療とは別に、複数国の利害が錯綜する現場で彼が示してきた調整能力である。一八四四（弘化元）年、アヘン戦争後に沿岸五港が開港された中

国に初めて赴任する、意欲ある領事が求められたとき、オールコックは福州領事として外交畑に転ずることになった。それから一五年間、上海領事、広州領事に転じながら、イギリスによる極東経営の最前線で経験を積むことになる。とくに上海在任期（一八四六～五五年）は、上海が海関の制度をはじめ、ヨーロッパ列強の租界という意味において、国際都市としての繁栄の基礎を築いたときであり、一面においてオールコックは紛れもなく、「魔都上海」の生みの親である。しかし本稿の文脈においてとくに紹介しておくなくてはならないのは、一八五一（嘉永四）年に世界初の万国博覧会がロンドンで開かれたとき、中国側がこれに関心を持たない中で、上海領事という限定的な職掌ながら、自ら可能な限りの商品見本を収集し、イギリス貿易委員会 (Board of Trade) を通じて出品、その結果、「中国」が一参加国として万博の記録に残つたという事実である。

（二）日本に届いた万博参加招請

一八五一（嘉永四）年にオールコックが上海で活躍していたとき、日本はまだペリーの黒船を迎えておらず、世界のロンドン万博には招かれるべくもなかった。東シナ海の向こうの日本が数年のうちに開国し、極東勤務一五年のベテラン外交官として自らがその国へ、イギリスを代表し

て赴任することになるうとは、オールコックも考えていなかったに違いない。

オールコックは、一八五九（安政六）年六月、長崎寄港ののち、江戸に着任し、港区高輪に現存する東禅寺に英国公使館を設けた。アメリカにも先駆けて江戸駐在を開始した、最初の外交官となったのである。日本着任当初のオールコックは、中国時代の経験を踏まえて居丈高に振舞った面もあることが知られるが、一方、交渉の場に登場して行く幕閣、幕臣たちの品位ある態度に触れ、徐々に自分の姿勢を改めていった様子も、滞在記や各種の報告文書から読み取れる。何よりもまず、日英間の新たな外交関係を象徴する自らの立場を日本で確立することが最大の仕事であり、同時に、横浜を中心に開始されたばかりの貿易をスムーズに進展させることが、重大な任務であった。むしろ水面下では、イギリスのアジア経営という大きな文脈の中で、極東でのロシアの動きを観察するという任務を与えられていたのであるが。

彼にとつて、日本での、とくに当初二年間の困難を大きく二つに分けて述べるとすれば、一つは、すでに自分のような人間を迎えていながら、開国・開港の効果を最小限に抑えようとする——典型的には開港・開市延期問題のように、すでに条約に盛り込まれた開国の方向から後戻りしよ

うとする——幕府の外交姿勢であり、いま一つは、彼自身の存在も要因となつて徐々に過激化する攘夷派に、命を狙われながら暮らす——しかもその役職上の必要から、逃げ隠れせず堂々としていなければならない——ことであつた。そのいづれもが限界に達しつつあつた一八六一（文久元）年五月、翌年のロンドン万博についての知らせを、本国外務省から受け取つたのである。その万博に、日本の参加を正式に要請せよという。

万国博覧会への招請は、当時も今も、外交ルートによつて行われる。つまり現代においても、万博は、あまたある民間のイベント等とは一線を画した公式行事である。それを前提に考える限り、日本が万博主催国との外交関係を持つていなかった一八五一年のロンドン博、五三（嘉永六）年のニューヨーク博、五五（安政二）年のパリ博に、招請もされず、参加もしなかつたのは当然であり、他方で、すでにイギリスと条約を結んで外交関係に入り、オールコックという全権使節が日本国内に居住を開始していた一八六二（文久二）年のロンドン万博に、その外交ルートを通じて招請を受けたのもまた、当然であつたと見ることができ。計画中のロンドン万博に任国の参加を得よとの指示が、全世界に駐在するイギリス代表に向けて本国外務省からいつせいに——機械的に——送られたのは、万博開催前年

の一八六一年三月のことであり、その内の一通が、時間をかけて日本のオールコックに届いたのであった。

イギリス政府が日本にその書類を送ったのは、あくまでも、オールコック駐日公使という届け先があったからである。しかし、それ自体は当然と言うしかないこの招請指示が届くことと、届かないこととの、日本にとつての差は大きい。そのとき起こったことの性質を、どう捉えるか。それを考える一つの視座を示すことが、本稿の目的ということになる。

(三) オールコックの反応と幕府の対応

日本の参加を招請せよとの指示がオールコックに届くところまでは、イギリス側の手続きとして当然でも、日本がそれに応じて参加することは必ずしも当然ではなかった。オールコックにとつて二つの困難が限界に達しようとしていたと先に述べたが、一つには、当時、条約に定められた今後の追加開港（兵庫、新潟）・開市（江戸、大坂）について、幕府からの延期要求が強硬になり、当時はまだそれを受け容れる意向を持っていなかったオールコックとの間で、もはや接点が失われつつあった。そして、いま一つの問題の頂点をなしたのが、世に言う東禅寺事件である。在留外国人やその関係者の命を狙う予てからの動きが、ついにオー

ルコック自身に及び、一八六一（文久元）年七月五日の夜、水戸浪士の一団が東禅寺の英国公使館を襲った。結果としてオールコック自身は無事だったが、ローレンス・オリファントら部下のイギリス人外交官二名が重症を負って帰国するに至った重大事件であることは、一般にも知られていよう。

この事件が発生したのは、万博招請の指示を受けていたオールコックが、日本側にそれを正式に伝えるよりも前のことであつた。五月には指示に接しながら時間が空いているのは、このあと本稿の主要テーマとして取り上げる旅行と、その直前の香港出張のために、まさに東禅寺事件が起きる前日まで、彼が江戸の公使館を留守にしていたためであると考えられる。

自然に考えて、彼は、これほどの事件に遭遇した以上、日本は万国博覧会のような国際行事に参加する状況にないと判断し、その旨、本国に回答してもよかつたのである。しかし、彼はそれとは異なる反応を見せた。東禅寺事件の一日後、事件に関する日本側との初の公式協議を四日後に控えた七月一六日に、オールコックは、日本に万博参加を促すための書簡を、彼が日本政府の外務大臣と位置づけていた、幕府の老中に宛てて発出している。

彼は万国博というものを、「すべての国の国民が、芸術、

工業、農業など、産業のあらゆる分野において、それぞれの達成した進歩を示すのに最もふさわしいと考えるものを何でも送り込むよう招かれた」場であると説明したうえで、東禪寺事件の問題を絡め、次のように述べる。⁶⁾

あの夜、誤った方向に導かれて公使館員の殺害を謀った男たちは……そのような幼稚な行動によって自らの評価を高め、そして帝国の力を諸外国に光り輝かすことができるという、倒錯した考えの持ち主だったのではありません！——とすれば、私はこのように言っても許されると思いますが、日本のあまり教育程度の高くない階級に対し、何が個人に真の名譽を与え、また諸外国において一国に栄光を付与するのか、ということについて正しい見識を示せるか否かは、世界の大博覧会が開かれようとしているこの機会に、大君の政府が、それを一般に知らしめることが自国の利益につながるかと判断できるかどうか、そこにかかっているのではないでしょう。博覧会には、地球上のあらゆる国々や人々が参加するでしょう。そして、産業や芸術のいかなる分野でも、さまざまな競争が繰り広げられるでしょう。そこで優秀さを認められることこそが、個人にとって比類のない名譽もしくは栄光なのだということを、知らしめるのです。

この文面に、自分を殺害することで国の名譽を守れると考えている一部の日本人と、そうした行動を抑えることのできない幕府への皮肉が含まれていることは言うまでもない。しかし、ここで驚くべきは、そうして日本人が守ろうとしている名譽を、「世界の大博覧会」のような場面で、産業や芸術の優秀さを賞賛されることで獲得する名譽へと、昇華させる道を示していること、そして何よりも、それゆえ日本に万博への参加を勧めるということとどまらず、いまやそうした国際競争の場が設けられる時代がきていることを、幕府が広く一般の日本人に知らせるべきであり、知らせることが日本にとってプラスになると判断できるかどうかは国の将来がかかっているというところまで、説き進んでいることであろう。

これに対して幕府は、一ヵ月強を経た八月二四日（文久元年七月一九日）付の老中名の書簡で、「万国博覧会（「百工新技之観場」の趣旨をよく理解したこと、オールコックの勧めるように、そのような場で日本の名譽を輝かせることが自分たちにとっての喜びとなるであろうこと、出品にふさわしいものがあれば教示してほしいことを、返信するのである。オールコックは九月一九日付の公信で本国外務省宛にこれを報告、⁷⁾日本は、一八六二（文久二）年ロンドン万国博覧会の公式参加国となった。⁸⁾

二、オールコックの買い物の旅

(一) 一八六一(文久元) 年夏の大旅行

少なくとも後世から見ても、日本はこのとき、世界に向かって自らを開くという方向へ、重大な舵を切ったことになる。その前提としてオールコックが、自分の置かれた状況を劇的なまでに前向きに転じ、その方向へ日本を促すという発想を持ち得た理由を考えるには、本来、ここに至る日本在勤二年間の彼の経験や思考を追い直し、先に述べたオールコック自身の直面する困難の一方で、自らの来着を含め、国際情勢の激動に対応しなければならぬ日本側の困難の性質を、彼がどう理解していたのかについて、詳述しなければならない。

しかし紙数の限られた本稿では逆に、そうしたオールコックの日本をめぐる思考の跡については、彼が幕府に宛てた万博招請の書簡そのものから読み取っていただくことにして、東禅寺事件に遭遇する直前の、いわば最終段階で、より直接的、具体的に、その時点での彼の日本理解を完成させたと考えられる、旅の顛末を取り上げたいと思う。先の書簡でオールコックが、万国博で産業や芸術の「優秀さを認められる」ことが日本にとっての突破口になるという

考えを示したとき、それがその場限りの美辞や方便でなかったことは、彼がその著名な日本滞在記『大君の都』(The capital of the Tycoon: A narrative of a three years' residence in Japan, 2 vols. London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863) の中でもたびたび、日本の産業や芸術の優秀さを称えていることから自ずと理解できようが、とくに彼のそうした評価を決定づけたのが、この旅行であつたと考えられるからである。

その旅行とは、一八六一年六月一日に長崎を出発、七月四日に東禅寺に帰着した、日本縦断の旅である。香港出張の帰路、あえて船で江戸に戻ることをせず、いわゆる内地旅行を決行したのである。江戸時代、対馬を経て下関に入り、江戸に向かう朝鮮通信使や、長崎の出島を起点とするオランダ商館長の参府旅行は、合わせれば少なくとも数年に一度の頻度で行われてきており、日本の国内を外国人が通行することがなかったわけではけつしてない。しかし、將軍への拜謁を目的としたこれらの儀礼的な旅行と異なり、駐在外交官のより日常的な業務に属する「視察」のための旅⁽⁹⁾というのは、文字どおり初めてのことであり、その実現自体が、日本の国際関係史に大きな節目を刻むものであつた。

ここで、これへの幕府側の対応を詳述する余裕はないが、⁽¹⁰⁾

むろんオールコックにとつては、西洋国際法上、そうした自由行動が許されるはずの外交官としての自らの立場を、日本において確立するという深謀遠慮があつての計画であり、当初は抵抗した幕府も最終的にはよく協力した。オールコックがこの旅を通じて日本各地の実情に触れたことは言うまでもないが、とりわけ、もともと好きな工芸品類の物色を楽しんで理解を深めたことは、日本の万博参加との関係で、重大な意味を持つことになる。

旅の同行者は、長崎を本拠としていたオランダ総領事のヤン・カール・デ・ウィット、オールコックの部下で長崎駐在のイギリス領事であつたジョージ・スタウントン・モリソン、江戸から香港出張を含めて随行していたイギリス公使館員のアベル・アントニー・ジェームズ・ガワー、そして、折しも日本に到着したばかりの *Illustrated London News* 紙特派員チャールズ・ワグマンである。⁽¹¹⁾ とはいえ、これに幕府側の護衛として、長崎奉行支配の役人が延々と行列をなして従うのだが。

六月一日に長崎を発した二行は、当時の幹線道路であつた長崎街道を通り、嬉野、武雄といった温泉地を経て、九日間かけて北九州を横断していく。小倉から船で下関へ。いったん上陸のち、ここから兵庫までは、往年の朝鮮通信使同様、瀬戸内海を船で渡る。兵庫から陸路を八時間移

動して大坂に入ったのが、六月十六日。大坂に三泊し、その後、東に向けて生駒山を越え、奈良へ。本来なら北上して京都に立ち寄るところであつたが、国情騒然としつつある折、そればかりは避けてほしいとの幕府の要請に応じて、奈良から笠置、伊賀上野を抜けるという、まさに外国人未踏の領域を通過することになった。鈴鹿山脈の膝元、関宿で東海道に合流、ここからは亀山、桑名、そして、岡崎、掛川、箱根……と一路、東をめざして進む。七月四日、東禅寺着。

(二) 大坂滞在

本稿冒頭で紹介した一八六二(文久二)年ロンドン万博の日本カタログに登場する地名が、どうやらこの旅と深い関係がありそうだということは、もはや説明するまでもないであろう。ここからは、その中でも格段に多く現れる大坂に焦点を合わせ、精度を高めてオールコックの様子を追ってみることにしたい。

大坂へは、既述のように、一八六一年六月十六日(文久元年五月九日)、兵庫から陸路を八時間かけて到着した。オールコックは騎馬であつたと考えられる。遠くに大坂城の姿を見てから、いよいよ大坂の街に入るまでに、なお一時間を要したといい、その後ほどなくしてオールコックが

「七一ヌ川のサン・ルイ島のような感じ」と記す場所、つまり中之島を見ることになるが、その前後の情景を、彼の筆は次のように書き留めている。⁽¹²⁾

……通りは、ひじょうに多数ではあるがきわめて秩序のある群集であふれんばかりであった。もちろん、並んでいる群衆のあいだでは押し合いへし合いしており、ときどき前列の者が運悪く列から押し出されては警吏に手ひどくこづかれていた。だれかれの容赦なくむき出しの頭の上にひどい打撃が加えられた。とはいえず、警吏たちは扇子でたたいていただけだから、たいした危害もなかった。……

警官に扇子で頭を叩かれなくなったことを除けば、今日われわれが祇園祭やら三社祭やらの折に、行列を一目見ようと、沿道を埋め尽くしててんでに背伸びする有様と実によく似ているが、要は、大都市に入ってきたオールコック一行はとたんに、視察者であると同時に大群衆に見物される側になってしまったわけである。しかしやはり視察者として、オールコックは自分を注視する見物人たちの様子につぶさに目を向け続け、そのお見合いの結果について「外国公使を見ようという好奇心はつよいものだったが、どこにも敵意は見当たらなかった」と述べる。⁽¹³⁾このとき新たな開市問題の対象となっていた大坂について、民衆の外国人

への敵意というのが、開市の延期を望む幕府が主張する大きな理由の一つであったが、それがあたらないことを自ら体を張って確かめたというところであろう。こうした群衆の様子は、「警吏の扇子」の話とともに、旅を終えたのちのオールコックから本国外務大臣宛の報告にも詳細に記されている。⁽¹⁴⁾

『大阪編年史』によれば、一行は市内の願教寺に宿泊した。⁽¹⁵⁾この寺院は残念ながら現存しないが、別名を廣教寺といい、⁽¹⁶⁾一八四五（弘化二年）の「弘化改正 大坂細見圖」⁽¹⁷⁾では、阿波座堀の南岸西寄り、薩摩堀と木津川の流れにぐるっと囲まれた敷地に、はつきりと「廣教」の文字を確認することができる。現在、阿波座堀は埋め立てられて中央大通となり、その上を阪神高速が、下を地下鉄中央線が通る。薩摩堀もやはり埋め立てられ、地下鉄阿波座駅南側にある薩摩堀公園がその跡地である。その間に位置する大阪市阿波座センタービルの建つあたりに、この寺があったと考えられる。

なお、『大阪編年史』がここにオールコック一行が泊まったとする主な根拠は、同書中に翻刻されている「末代控」なる史料であると考えられ、これを紹介した論文も存在するが、⁽¹⁸⁾この史料では一行のメンバー構成に疑義があり、扱いは注意が必要であることを付記しておきたい。しか

し、右記の地点を起点とした場合、オールコックの記録に残された街なかでの動きに整合性が見出され、それがこの「末代控」中の記述とも補完しあうことから、一行の大坂での行動を書き留めた貴重な史料として、一定の留保とともに活用してよいものと筆者は考えている。

さて、これまでの旅程にない長逗留でここに三泊したオールコックは、到着翌日の六月一七日を主として買い物と観劇にあて、一日日は、大坂じゅうに張り巡らされた堀を通って、船で街のさまざまなエリアを回ることを楽しんだ。しかし、四天王寺を見せるといふ日本側の提案を受けて船を降りてしまい、街の南端と言ってもよいその場所まで、長途、炎天下を案内されたのはよほど不満だったらしく、滞在記中のその折の記述は笑いを誘う。⁽¹⁹⁾宿所を出発したのち、まず北上して北新地方面から天神様(天満宮)に回り、その後、天王寺へ向かったことは、先の「末代控」にも見える。

それにしても、右記の阿波座堀、薩摩堀の例からもわかるように、今日ではほとんどが埋め立てられ、率直な印象として醜いと言わざるをえない景観に変貌してしまう前の「水都」大坂は、どれほど美しかったのであろう。オールコックはその情景を、次のように書き記している。

この都市は、大きな川にのぞんで絶好の位置を占めて

いる。川は、谷間をうねって多くの支流に分かれ、さらにそれが運河でつながれている。そして、こういった水流と街が密接に組み合わさっていて、山並みから海に向かつての何マイルもの土地を占める大平野の上に拡がっているのである。……たしかに当地は、日本のベネチアである。たくさんの橋がいたるところでこのさまざまの水流にかかっている。……その情景は、その美しさにおいてイタリヤの川の情景にも劣らぬほどだった。イタリヤと同じ輝く太陽がすべてのものの上に照り、建築美の代わりに風変わりな突き出した屋根や不規則に群らがつた露台やベランダが一種の優美さと独創性を誇っていた。⁽²⁰⁾

道頓堀での観劇については、オールコックは滞在記中に延々とその内容を書き留めるなど、⁽²¹⁾強い関心を持ったことを示しており、またこの件は、江戸でいかに希望しても幕府の反対によって叶わなかった芝居見物が、この大坂で実現した経緯を含め、興味深い歴史的エピソードに富んでいるのだが、本稿の目的を貫徹するために、同日朝からの買い物の様子に、さらに照準を絞っていくことにしよう。

(三) オールコックの買い物

オールコックが江戸帰着後の一八六一(文久元)年七月

一〇日付で本国外務大臣宛に認めた報告文書には、開市予定地である大坂について、その商業都市としての繁栄ぶりや、先述の民衆の様子などが、旅行全体の中でも最大の関心の対象であったことを物語るだけの紙数を割いて記述されている。⁽²²⁾しかしここには、大坂でずいぶんと精を出したはずの買い物については出てこない。買い物もまた、正当な国情視察の手段であるとは思いますが、やはり個人的な楽しみという色合いが強いために、公式報告文の内容からは省いたものであろうか。しかし、すでに何度か引用している、一八六三（文久三）年にロンドンで刊行された滞在記『大君の都』には、生き生きとした買物の様子が描かれている。

買物に関係のある場面を拾っていけば、大坂に着いて一夜明けた翌日、つまり六月一七日、「買ったり調べたりする値打ちがあると思われる品物を置いてある店にはいりやすい」がゆえに、乗り物や馬ではなく、あえて徒歩で見物に出たこと、「数軒の大きな絹製品を売る店に連れてゆかれた」が、それは「江戸の最大のものよりもまだ大き」かったこと、「五〇名から一〇〇名ほどの店員がいたように、……望むものはなんでも敏速にとり出してくれた」こと、それらの店でのちほど品物を宿に持ってくるよう注文し、その中から「つづれ織り・ししゅう・絹製品を選んだ

が、何分にもそういう女性用の品物にはうとい方なのでたいへん当惑し、趣味と判断力をひとりで兼ね備えて選ぶことのできるような人がいなかったのを残念に思った」こと、「漆器屋にはいったのだが、そこに陳列してあるものは大してよくもない品物なのに、値段はまったく法外なものだった」こと、「陶磁器を探すことについては、もうすこしうまい具合にいった」こと……等々の記述が次々と見出される。⁽²³⁾

絹製品を売る巨大店舗での買物が、先の「末代控」にある、唐人（外国人）らが文久元年五月一〇日、「三井岩城にていろいろと買物」したという記載に対応することは間違いないだろう。三井は言うまでもなく現在の三越、越後屋三井呉服店であり、岩城とは枳屋岩城呉服店、いずれも当時、代表的な呉服商として権勢を張り、大坂の中心、高麗橋の袂に大店を構えていた。⁽²⁴⁾なお、この史料によれば、同日の買物には一行の全員が同道したのではなく、買物組のほかに、朝から料理屋で騒ぎながら大坂城を遠望していた組と、天保山の視察に回った組があったらしい。⁽²⁵⁾あるいはこの両者は同一のメンバーが移動したものかもしれない。滞在記中のその後の記述から、オールコックがオランダ総領事デ・ウィットと同道していたことは間違いないから、他の若い人たちが別行動をとったものであろうか。

オールコックは、女性用の品物にうといゆえうまく選ばなかったという絹製品について、しかし「それらの品物は織り物の見本としてはまんざら悪いものでもなかったたので、全部万国博覧会に送った⁽²⁶⁾」と、滞在記に記している。むしろ、買い求める時点で、そのことは彼の念頭にあっただろう。が、そうしたことにいっさい触れられていない先述の七月一〇日付外務大臣宛報告文が書かれたのは、まだ日本の万博参加が決しておらず、そもそも万博について日本側への伝達が完了する前の段階である。その後、日本の万博初参加が自らの肝煎りによって滞りなく、しかも大成功裏に終わったあとで刊行された滞在記には、このような記述が散見されるのも当然と言えるかもしれない。

さらに注意深く文面を追っていくと、とくに万博との関係が特筆されているわけではないものの、大坂の青銅製品の店で「ひじょうに古風で優雅な釣り燭台」と「精巧な彫刻をほどこした木炭用の火鉢」を見つけ、安い値段で手に入れた⁽²⁷⁾ことが、楽しみに、具体的に振り返って書かれている。これらが、本稿冒頭で紹介した、オールコックの執筆になる日本カタログ中、「439 精密な彫刻を施した青銅製のすばらしい吊り灯籠。大坂で見つけたもの」「429 大坂から運ばれた、現代的な銅製品のすばらしい見本。周囲の羽目板一つ一つに高く浮き出した人物像のある火鉢」

とそれぞれ一致すると解釈しても、乱暴な推測にはあたらないであろう。

三、一続きの道

(一) 万博出品の準備

こうして買いい物は続き、さらに陶磁器の店については「われわれが出たときには、棚の上はかなりすいていたにちがいない⁽²⁸⁾」などと自ら記すほどであるから、オールコック一行の荷物は、大坂を出発するときには大変に膨れ上がっていたであろう。この大坂滞在を典型として、約一カ月の旅行中、各地の店先で買いい物を楽しみながら、またそれを通じて、商業の実態や諸所の人情、風俗を観察しながら、江戸に向かっていったのである。

先述のように、そうした買いい物の話が当初の公式報告にまったく出てこないのは、オールコックがもともと、これを専ら自らの楽しみとして行っていたことを語っていないように、同時に、買い集められた品々は、日本の万博参加の可能性と結びつくことによって、別の性格を帯び始めたと言えるだろう。オールコックは旅行以前から、好んで日本の美術工芸品を買い求めることが少なくなかったと考えられるが、このときの旅は、集中的な収集旅行とでも言うべき

側面を持ったものであった。同時に、日本の産物が国際的な競争に耐えるとの認識を、オールコックの中で固めさせる機会ともなったはずである。

東禅寺に戻り、水戸浪士の襲撃を受け、未処理のままになつていた万博参加招請の問題も含めて、次の出方を熟考する必要に迫られたとき、彼の脳裏に旅の思い出がまだ鮮やかであつたのみならず、その手もとに、日本の各地から集めてきたばかりの品物が現実には、豊富に存在したこと——これが、オールコックの決断に一定以上の影響を与えたと理解することは、けつして不当な深読みではあるまい。仮に日本が万博参加を決意しても、初めてのことで、迅速な準備が期待できるわけでないことは簡単に想像できる。一八五一（嘉永四）年の第一回ロンドン万博に際して、上海からの出品に骨を折つた経験のあるオールコックだからこそ、日本側の不慣れを補い、自分が中心となつて出品物を整える用意が実際にあるかないかが、当然ながら、ここでの判断を大きく左右したのである。加えて、これらの品物が日本に「比類のない名譽もしくは栄光」を与えうるものだと的確信を、事前に、きわめて具体的な物証とともに持つていたことが、彼の東禅寺事件の受け止め方を方向づけた——むしろ事件との遭遇が、日本を万博の舞台へとつれ出すことを彼に決意させた——と考えるとよいのではな

かろうか。

実際に、幕府が万博参加を承諾すると、オールコックはすぐさま次のような返書を老中に宛てて送つてゐる。

私ハ……（出品物の梱包、発送、開梱などに關する）困難を見越したうえで、あらゆる人間の才能と労働が生み出した最高の品々が集まるこの博覧会において、日本のためにふさわしい地位を確保したいという願いから、日本人の国民としての優秀さが最もよく現れてゐる……美術や工芸分野の多くの作品を、念入りに選び、かなりの費用をかけて買ひ求めました。これらはすべて、ごく近いうちに本国に向けて発送される予定でございます。⁽²⁹⁾

オールコックが幕府に万博のなんたるかを説明する書簡を送つてから、幕府の承諾を得るまでに約一カ月の時間が流れており、この手紙の筆致からは、その間に彼が着々と発送の準備を進めていたことが推測できる。彼が公職を引退したのちに著した『日本の美術と美術産業』では、同じ時期のことがこう振り返られている。

……私は、首都の江戸に駐在する者としても、また、国内各地の旅行者としても、すでに長いこと日本に暮らしていたので、日本人が芸術面においていかに優れているかということや、日本の産業製品の長所を十分

に知っており、高く評価していた。実際、その時点までには、自分自身の研鑽と楽しみのために、彼らの芸術の独自性や発展過程を示すような品々を、かなりの数、収集していたのである。残された仕事といえは、芸術と産業の各分野について、日本人の技量と才能を最も典型的に、よく表している見本を念入りに選びつつ、より多くの出品物が必要になってもよいよう、さらに品物を買ひ足すぐらいのことであった。この目的のために、私は横浜にある各種の倉庫や商店を頻繁に訪れた。……それだけではなく、当時、外交関係者以外の外国人は入ることのできなかった江戸市中の、いくつかの商業区域にも足を運んだ。……

このほかに、自分では整えることのできなかった和紙のサンプルと、日本の硬貨一揃いを幕府に提供してもらい、オールコックによる日本コレクションは完成する。幕府にそれらを依頼したのは、品物の性格上、現に幕府に手配してもらった必要があったためであろうが、出品準備をすべて自分の側だけで進めるのではなく、手順に慣れない当事国政府を、何らかのふさわしい形で作業に参画させるという意図もあったことである⁽³¹⁾。

これらの品々がいつ、どの船で日本を旅立っていったのかについては、残念ながら現時点で確認できていない。し

かし、あの青銅の吊り灯籠や、彫刻のすばらしい火鉢から、幕府が用意した和紙や硬貨のセットに至るまで、オールコックが自らカタログを仕上げられるほどに観察し、いくつかのものについては入手地を再確認し、入念に整理したうえで、おそらくは彼の指示のもと、それらが部下たちによって梱包され、この年のうちに海上に出ていったであろうことは、間違いないのである。

(二) オールコックの旅と日本の「開国」

筆者はここに、日本の開国の過程における、一つの重要な画期を見る。当然ながら、日本の産物が海外に出ていくこと自体は、初めてではない。古代からの大陸との行き来に始まり、「鎖国」と称されてきた時期においても、オランダや中国の商人によって、また、朝鮮通信使への贈り物という形をとって、多くの品物が国外にもたらされたことは言うまでもない。しかしこのとき、幕府の厳重な管理下に置かれてきた流通経路を通じずに、オールコックが旅先で、いわば無造作に購入した一群の品々が、万国博覧会という舞台で日本文化を代表すべく運び出されていったことには、日本と国際社会とのかかわり方における重大と云ってよい変質が見出される。

何気なく購入した品物が国外に出ていくのも、すでに当

たり前に起こっていたことであるとの反論がありえよう。オールコックが自ら旅を実行して試したように、当時、日本の国内を自由に行動できる権利を持っていたのは外交官身分の人々のみだが、開港地の定められた居留地には多くの外国人が住み始め、商売用の品のほかに、私的なおみやげをいくらかでも持ち出していたし、日本側でもそうした外国人の好みに合う商品をつくるようになっていたのであるから、その反論もむろんのことである。しかし、それとこれとがやはり異なるのは、右でも触れたように、オールコックによって送り出された品々が、即、万国博覧会という舞台で日本文化を代表する——国際的な比較競争のための「日本の芸術や産業の見本」という性格を帯びる——宿命を負っていたことであろう。ある日偶然に柵屋岩城呉服店の在庫にあった反物が、翌年にはロンドンで日本の将来を背負っている——そうした状況、可能性が、日本にとつて初めてここに出現したと言えるのではないか。

その意味で、各国と和親条約ないし通商修好条約を結んだり、港を開いたりするという、表向きの重大事件を越えた、「国を開く」ことの意義が、ここにはたしかに横たわっている。ごく当たり前の、めぐり合わせによっては普通の日本人が買い求めて日常に使用することもできたはずの品物が、江戸の英国公使館に運ばれ、「日本代表」のラ

ベルを貼られ、ロンドンに運ばれ、万博の日本コーナーを飾りうるということ。逆に見れば、むろん品質による選択がなされるとはいえ、理論的には国内のすべての品物が、物理的に遠国へ輸送され、かつ、国際市場で「日本物産」の名の下で扱われる可能性を付与されたということ。——少なくともこのとき、オールコックが旅した道に沿って、そうした可能性が、まるで「開国」マークのシールを貼って歩くように刻印されたのである。

筆者は、朝鮮やオランダとの交流が存在した事実から、江戸時代を「鎖国」の時代と規定することに疑いを持ち、いわゆる黒船後の西洋諸国との外交を、それ以前の時代からの連続性の上に見ようとする者の一人である。が、より実質的に国の隅々までを開いていくという意味での、「鎖国」からの「開国」を考えようとする場合、一八六一（文久元）年のオールコックの旅は、看過することのできない大きなステップであったということになりそうである。また、国内で産出された個々の品物が、対外的にはただちに「日本の」ものとして扱われる環境に置かれたことは、まさにその「日本」という全体が、国民国家を単位とする大きな社会の一角に引き入れられたことを示していると言える。

この旅が直接ロンドン万博につながったことは、時がも

たらしただ偶然には違いない。同時に、現場の中心に居合わせたオールコックという人物の思考のあり方、発想の転換による「人為」でもあったことは、いま、本稿第一節で引用した彼の幕閣宛、万博参加招請の書簡を読み直せば明らかであろう。万博出品の結果、日本の美術工芸品はイギリスないしヨーロッパで大いに注目を集めるに至ったのである、オールコックが、その意味での功労者であることは、たとえば美術史などの分野においてもよく知られるところであるが、そうした効果にとどまらない、日本の本格的な「開国」の立役者として再評価したいと考える所以である。

(三) 文化交流の道を歩く——結びにかえて

一八六一（文久元）年夏、オールコックが歩いた足取りに沿って、「開国」のシールが貼られていったと言うとき、むろんそれは、一筋の線をなすものであって、面をなすものではない。これまでに何度も引用したオールコックの著『大君の都』の英文原本第一巻には、日本地図が折り込まれ、そこに、まさにこのときの旅の行路が赤い線で示されているのだが、ほかでもないこの赤線こそ、「開国」の刻印であるともできるだろう。³²⁾

たとえば大坂から「ひじょうに古風で優雅な釣り燭台」や「精巧な彫刻をほどこした木炭用の火鉢」が運ばれたこ

の赤い道は、オールコックと幕府の間でなされた日本の万博参加の決定により、オールコックの日本縦断旅行の足跡であるにとどまらず、日本の国境を越えてロンドンまでつながる、地球儀上の長い道筋の一部となったのである。大坂からロンドンまでは、一続きの道となった。日本の沿岸に、いわゆる黒船をはじめ多くの船舶が開国を求めてやってきたこと、中国沿岸までしかカバーしていなかった欧州列強の商船の航路が横浜まで届いたこと、——日本が国際社会の一部となったことを語る材料は多様だが、筆者は、この釣り燭台を運んだ道の成立を、重く見たいと思うのである。

さて、外国人による初の「視察」旅行を行ったオールコックはまだ、その目的での旅を決行しえたのみで、それ以前の「儀礼」旅行者である朝鮮通信使やオランダ商館長同様、公道を外れてどこにでも入り込むという自由までは、理論上はともかく、実態としては許されていなかった。本項冒頭で述べたとおり、この旅が決定づけたのは、面ではなく線の開国だったのであり、このあと、線が面となっていくプロセスには、一方において、幕末の最終局面にかけてさらに日本各地を動き回ったオールコックの後輩、アーネスト・メイソン・サトウのようなケースから、明治維新後一〇年を経て、一般外国人の内地雑居が認められるよう

になっていくまでの、国内への外国人受け入れの度合いという角度から見た、制度の進展がかかわってこよう。

他方、このあと、一八六七（慶応三）年パリ万博、一八七三（明治六）ウィーン万博と、日本が歴代の万国博覧会に参加していく過程に、線の「開国」が面になっていく、もう一つの展開を見ることができると。

この間、日本の出品準備に際して、一八六二（文久二年）ロンドン博におけるオールコックのような、万博主催国側の人物の関与度合いは徐々に減少し、日本政府側の主体性が増していく⁽³³⁾。そうして日本政府当局が当然の統治能力を発揮し、国内の機構を動員することによって、外国人が日本国内を動き回れる範囲とはかかわりなく、万博で日本を代表するための産物を全国から収集することが可能になっていった。いわば「開国」の刻印が押される範囲が、外国人が通ることのできた公道沿い——オールコックの地図上の赤線——から日本全国へと広がっていく様は、まさに日本それ自体の実質的な「開国」のプロセスを表しているように見える。その起点をつくったオールコックは、自ら日本を離れたのちに開催された一八六七年パリ博について、のちの著書に、「再び日本の品物のすばらしいコレクションが展示され、（一八六二年のロンドンで道が開かれた）同じ方向にさらなる前進が見られた」と記した⁽³⁴⁾。

ただし、オールコックが歩いた道——長崎街道から瀬戸内の海の道、奈良の道、そして東海道といった道のり——は、先に記したような違いはあるものの、全体として見れば、彼が初めて開拓したのではなく、本稿でも何度か触れた朝鮮通信使やオランダ商館長の行列などを見てきた、古くからの文化交流の道であった。外国ばかりでなく、むしろ国内各地の間の交流も含めて、さまざまな文化の出会いが重層的に歴史を刻んできた道は、それ自体が国際化の仕掛けであり、開国の種を孕んで時を待っていたのである。そこを一八六一年夏というタイミングで通りかかったオールコックは、日本の「開国」にとつて、種を蒔く人ならぬ、種に水を撒いた人であったと見るのがふさわしいようである。

注

- (1) 公式カタログの日本欄では、イギリス海軍関係者や貿易商人が現地を提供したと考えられる、オールコックのカタログにはない九組の日本製品が加えられている。(Authority of Her Majesty's Commissioners, *International Exhibition 1862: Official catalogue of the Industrial Department*, 2nd ed., London: Truscott, Son, & Simons, for Her Majesty's Commissioners, 1862, pp.338-9.)

- (2) 万博に参加する国や植民地の単位でこのような別冊カタログを用意したケースはほかにもあり、日本カタログもそうした中の一つとして、万博主催者のカタログ課に登録され、会場で正式に頒布されたものである。(See Form 245, *Collection of printed documents and forms used in carrying the business of the International Exhibition, 1862*, London: George Edward Eyre and William Spottiswoode, for Her Majesty's Stationary Office, 1863.)
- (3) カタログ原文における大坂の表記はOsakaとなっている。日本語での表記は、本稿では当時の通例に従い、原則として、引用部分、地の文ともに、大坂とする。なお、カタログの日本語訳は筆者の責による。
- (4) オールコックに関して、本稿の記述は既刊の拙著『オールコックの江戸——初代英国公使が見た幕末日本』(中央公論新書、二〇〇三年)と一部重複することをお断りしておく。
- (5) この知らせを受け取った時期について、前掲注4の拙著執筆時には一八六一年七月と判断していたが、その後、当時未見であった史料の調査機会を得、より早い時期であったことが判明した(Alcock to Russell, 27 May 1861, FO46/12 [PRO], pp.101.3)。受領前後の具体的な状況についてはさらなる精査が必要であるが、本稿よりこの点に関する筆者の見解を改めることはしない。
- (6) From Alcock to The Ministers of Foreign Affairs, 16 July 1861, FO46/14 (PRO), pp.92.4。(和訳は前掲注4「一七七—一七八頁に準じた」)
- (7) 前掲注4、一九三—一九四頁参照。
- (8) 従来、日本が参加した初めての万国博覧会は、この次に開催された一八六七(慶応三)年パリ博であるとの考え方が、半ば定説となっていた。六二年ロンドン博においては、日本側の与り知らぬところでオールコックが個人的に出品を行ったという見方によるもののように、以上の経緯から、六二年万博への日本の参加が紛れもなく、「外交ルート」を通じた招聘と回答によって決定したものであることを確認しておきたい。
- (9) オールコックはこれ以前、一八五九(安政六)年に箱館へ、六〇(万延元)年に富士山、熱海へ旅しているが、前者は海路、開港地への限定的な旅であり、また後者は、いわゆる「外国人による初めての富士登山」として有名な旅行ではあるものの、移動距離の差は言わずもがな、通過諸藩と幕府の関係といった国内政治の機微をオールコックが体感する機会となったことなどを含め、ここで取り上げる六一年の旅の歴史的重要性は比較にならない。江戸を目的地とした外交使節の内国旅行をめぐり、日本側の対応の変遷を、朝鮮通信使を起点に連続的に考察したものと、拙論「幕末の対欧米外交を準備した朝鮮通信使——各国外交官による江戸行の問題を中心に」(劉建輝編『前近代における東アジア三国の文化交流と表象——朝鮮通信使と燕行使を中心に』国際日本文化研究センター、二〇一一年、一九〇—二一〇頁)を参照ありたい。
- (11) このほか、本稿で主に取り上げる大坂へはとくに、この時期イギリス海軍から日本用の輸送船として配分された、

- リングダヴ号搭乗のクレイギー大佐が同行したことが判明した。 (Alcock to Russell, 10 July 1861, FO410/3 [PRO], p.10.)
- (12) オールコック著、山口光朝訳『大君の都 (中)』岩波書店、一九六二年、三八〇—三八二頁。
- (13) 前掲注12、三八二頁。
- (14) 前掲注11、一一頁。
- (15) 大阪市立中央図書館市史編纂室編『大阪編年史 第二十三卷』大阪市立中央図書館、一九七七年、三五三—三五五頁。
- (16) 西山昭仁「安政南海地震 (一八五四) における大坂での震災対応」『歴史地震』第一九号 (二〇〇三年)、一二五頁参照。
- (17) 人文社発行の覆刻古地図を参照した。
- (18) 堀田暁生「近代の国際交流(1)——開化大阪と来阪外国人」大阪国際交流センター編『大阪の国際交流史』東方出版、一九九一年、二六〇—二六一頁参照。
- (19) 前掲注12、三九八—四〇〇頁。
- (20) 前掲注12、三八三—三八八頁。
- (21) 前掲注12、三八六—三九七頁。
- (22) 前掲注11、一〇—一一頁。
- (23) 前掲注12、三八四—三八五頁。
- (24) 大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館常設展示案内』ミュージアムショップ文楽、二〇〇二年、六〇頁参照。
- (25) 前掲注15、三五五頁。
- (26) 前掲注12、三八四頁。
- (27) 前掲注12、三八四頁。
- (28) 前掲注12、三八六頁。
- (29) From Alcock to The Ministers of Foreign Affairs, 27 August 1861, FO46/14 (PRO), p.99. (訳・筆者)
- (30) Alcock, Rutherford, *Art and art industries in Japan*, London: Virtue and Co., 1878, p. 2. (訳・筆者)
- (31) 前掲注4、一九七—一九八頁参照。
- (32) 参考までに、第二巻の折り込みは、大坂の地図である。
- (33) 一八六七年パリ博では、駐日フランス公使ロッシュが重要な助言者の役割を果たしたが、徳川幕府自体の主体性は六二年ロンドン博とは比較にならないほど増大した。七三年ウィーン博への参加は、駐日オーストリア公使館員シーボルト、および、彼が推薦したとされる御雇外国人ワグネルの大きな働きがあったとはいえ、その助けを活用しながらの、明治政府自身による挙国プロジェクトであったと言える。
- (34) 前掲注30、四頁 (訳・筆者)。
(国際日本文化研究センター准教授)